

令和四年一月吉日

「地域活性化は正しい」——これは都会に住む者の勝手な思い込みではないか？ 過疎地域に 12 年住んだ著者が、現地での調査やインタビューをもとに過疎地域の「本音と建前」を鋭く描き出した意欲作です。1月19日（水曜日）発売。



◎ 本文より

私も都心で暮らしていたころは、過疎地域の活性化は正論だと考えていた。過疎地域の発展は地域住民の幸せにつながると信じていた。そうした思い込みのようなものが、過疎地域での暮らしを通して少しずつ変わっていった。なぜなら、そこには変わらないことを望む人びとの姿があった。何一つ変わることなく、どこにも飛び立たず、廃れ、寂れ、衰えていくことを望む人びとの姿があった。地域の活性化が叫ばれている昨今の時局を鑑みて、そのような過疎地域の人たちについての研究を進め、過疎地域の活性化は本当に必要なのか、今一度考えてみたかった。

◎目次

第一部 過疎地域批判——現状維持という名のゆるやかな後退

【第一章】 過疎地域のよくある事例

【第二章】 過疎地域のよくある問題

【第三章】 過疎地域批判

第二部 過疎地域分析——過疎地域の活性化は本当に必要なのか

【第一章】 地域の活性化は本当に正しいのか

【第二章】 過疎地域とは何か

【第三章】 地域活性化の事例調査

【第四章】 過疎地域の現地調査

【第五章】 田舎のいやらしさにおける考察

◎ 著者プロフィール

花房尚作（はなふさしょうさく）

1970年生まれ。SHOSAKU事務所代表。1級ファイナンシャルプランニング技能士、CFP®、宅地建物取引士、管理業務主任者、マンション管理士。演出家として戯曲やシナリオを執筆し、東京都新宿区にて舞台公演を行う。また、米国（ボストン）に二年間在住し、海外40カ国（180都市）を周遊。現在は放送大学大学院にて文化人類学を研究中。さらに外資系損害保険会社やハウスメーカーでの業務経験を活かし、FP相談も行っている。多業種に手を伸ばし、まとまりに欠けるものの、それがウリでもある。著書に『価値観の多様性はなぜ認められないのか』（日本橋出版）がある。

◎ 書籍詳細

書名：『田舎はいやらしい 地域活性化は本当に必要か』

著者：花房尚作

発売：光文社

発売日：2022年1月19日（水）

定価：本体900円＋税

判型：新書判ソフトカバー

【本件に関するお問い合わせ】

光文社 新書編集部

担当：小松 現（こまつ げん）

080-6843-3067

gen-k@kobusha.com